

>>> 仕事

私のキャリアデザイン >>> 第4回

# 学び続けることで見える 私らしい景色

## 放射線技師の野菜ソムリエができるまで



放射線技師の野菜ソムリエ  
くりたひろみ

福岡県出身。九州大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科（現九州大学医学部保健学科放射線技術学専攻）卒業。これまでに野菜や果物の魅力を伝える出前講座で訪れた小・中学校は50校を超える。現在、病院に従事する傍ら、地元企業と中学校を結ぶCSR活動や、コミュニティ食堂昇町の副代表なども務める。

秋になると、私は食育出前講座に小・中学校へ出向きます。そこで「野菜ソムリエプロですが、普段は診療放射線技師をしています」と言うと先生方に驚かれます。青空の下で育った野菜の魅力を伝える野菜ソムリエの姿と、病院の検査室でX線撮影をしている放射線技師の姿が結びつかないようですが、私の中では自然なことでした。ここでは、なぜそのような肩書になったのか、お話をさせていただきます。

### 「社会とつながる」をキーワードにPTA活動と資格取得

料理は好きだけど、調理師や管理栄養士は職業として違うな、とぼんやり考えていた高校時代。2年生の時に祖母がくも膜下出血で倒れたことがきっかけで、私は医療職を目指しました。九州大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科を卒業後、福岡大病院の放射線部に入職しました。どの職種でも言えることですが、国家資格を取

って終わりではなく、合格がスタートラインで、日々の業務や勉強会などで研鑽を積みまします。マンモグラフィ講習会の受講など様々なスキルアップを経験していきました。

在職中に第1子を出産。産休・育休を経て職場復帰しました。家族や周囲の人々の協力を得て業務に従事していましたが、第2子の妊娠の経過が順調とは言えず、産科の医師に「あなたは休みなさいと言っても休まないでしょう？入院しましょう」と言われて入院。その間、自分の働き方を見つめ直し、退職を決定しました。

退職時に、夫から「主婦になってもいいけれど、社会とつながってほしい」と言われました。その時は「そうだね」と賛同する程度でしたが、後になって、夫の「社会とつながる」という言葉が、私にとって「仕事とは？」を考える時のキーワードになっていると気づきました。

子どもたちの幼稚園や学校で、私はPTAの委員を引き受けることで、社会と

つながりました。そこで出会った委員の方々は多様でしたが、皆同じく「子どもたちのために」活発に活動されていて、奉仕とは何か、教育とは何かを学ぶことができました。

PTAの委員をするうちに、私は子どもも保護者も、「食」を楽しめていない現状に気づきました。「食は一生関わるもの。食を通して私ができることはないか？」と考え、そこから体系的に食を学ぶために、子育てしながら様々な資格取得を進めていくことになりました。食生活アドバイザー、フードコーディネーター2級、お肉博士1級、食品衛生責任者、野菜ソムリエプロ、受験フードマイスターなどです。それ以外にも、アナウンサーによる話し方講座やD・カーネギーの著書『人を動かす』から「人に伝える」ことも学びました。

野菜ソムリエとして駆け出しの頃、一緒にPTAの委員をした方が代表を務める「コミュニティ食堂昇町」の調理ボランティアに私も参加するようになります。小・中学校への



「コミュニティ食堂昇町」の仲間たちと  
(真ん中が筆者)

出前講座など野菜ソムリエの活動が軌道に乗った頃、新型コロナウイルスによるパンデミックとなり、食の仕事の全てがストップしました。その時、放射線技師の先輩が声をかけてくださり、非正規ですが17年ぶりに放射線技師として復職することになります。画像がフィルムというアナログ時代しか知らなかった私は、いきなりデジタルの世界に飛び込み右往左往しましたが、先輩方や若い放射線技師の皆さんのフォローのおかげで、プランクが少しずつ埋まっていきました。

### 「食MBAリカレント教育プログラム」を受講して

放射線技師の仕事にやりがいを感じる一方、このままではアフターコロナの時に食の仕事ができなくなってしまうのではという漠然とした不安を抱えるようになります。その時に出会ったのが、中村学園大学の「食MBAリカレント教育プログラム」でした。ほとんどをオンラインで学べるこの教育プログラムは、当時まだ外出制限があった医療職の私にとって、最高の学習環境でした。内容は、「食の中村」と定評のある中村学園大学らしいラインナップで、栄養科学や食文化概論、フードテクノロジーの講義に加え、MBAということで損益計算書や貸借対照表の読み方、マーケティングなど、独学ではきつと接することがなかった分野まで網羅されていました。Zoomを使った授業では異業種の方々とディスカッション

する機会もあり、新たな気づきを得ました。どの授業もとにかく楽しくて、提出するレポートは文字数をオーバーしがちで、要約するのが大変でした。

我が家の食卓では子どもたちが小学生の頃から、子どもたちは教科書を、私はテキストを開いて学んできました。「食MBAリカレント教育プログラム」は動画が中心で、スマホで見ることができ、隙間時間を活用できました。動画をリビングのテレビに映し出し、大画面で受講しながら洗濯物を畳んだりしていました。家事もできて一石二鳥。食に興味がある夫も子どもたちも一緒に見て、感想を言い合い皆で楽しみなが学びました。そうすることで「レポート進んでる？」と家族がリマインダーになってくれました。

親が子どもに学ぶ姿を見せてきたからか、私は子どもたちに「勉強しなさい」と強く言ったことがあります。塾に頼ることなく、2人とも第1希望の高校・大学に進学しました。さらに、学外の講座や資格取得の勉強もしています。2人が楽しんで学ぶ姿を見てみると、「学び」は「勉強で強いる」ではなく「勉強して楽しむ」ことだから続けられるのだな、と感じています。

コロナ禍が落ち着き日常生活が戻り始めてからは、職場の上司の理解を得て放射線技師をしながら小・中学校へ食育出前講座をするようになりました。「放射線技師の野菜ソムリエ」はこうしてでき上がりました。

以前は野菜や果物の魅力を伝えたいとい

う一心で登壇していましたが、教育プログラムを受講してからは、野菜の魅力を通して、歴史や食文化、食に携わる人々の知恵と情熱を伝えたいと思うようになりました。

また、コミュニティ食堂昇町ではメニューの提案だけでなく、ボランティアスタッフや調理する時の動線のマネジメントや充足感の創造等も考えるようになり、さらに、訪れる人々の社会的孤立を防ぎ自己肯定感を高める一助になりたいという気持ちも湧いてきました。教育プログラムで学んだことで、「食」を通して、人が、地域が、社会が、まあるく温かくつながっていくことを願っています。コロナ禍の閉塞感にもがいていた頃に、希望を持って教育プログラムを受講して本当に良かったです。

私は、最初から放射線技師の野菜ソムリエを目指していたわけではありません。「これだ」と思うことを学び続けた結果が今につながっていて、計画的に自分のキャリアをデザインしていません。出会った人、タイミング、経験したこと、全てが必然のように思います。

学ぶにあたり、時間が捻出できるだろうか、仕事や家庭と両立できるだろうか、不安はいくらでも考えつきます。しかし、何より「学びたい」と思った自分を信じるのが大事です。動き出せば、自分も変わるし協力者も現れます。世界には数え切れないほどのワクワクする学びがあります。「勉強して楽しんだ」その先には、自分らしい景色が広がっています。